

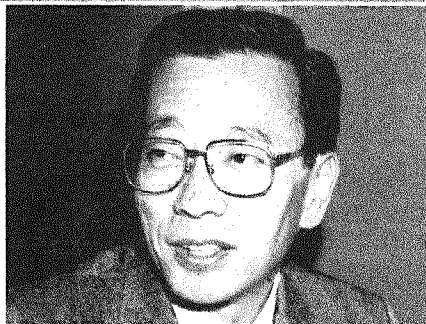
# ドクター+フジ



ニッポン  
ドクター和の  
臨終区巻

皆さんは「フィクサー」という言葉から、どんなイメージを浮かべますか？ 裏社会の黒幕でしょうか。私は、この言葉にあまり悪い印象を持っていません。縦糸ばかりが絡み合う組織社会において、各キーパーソンを繋（つな）ぎ、社会のために横糸を紡いでいく…例えば、あの西郷隆盛も、凄腕フィクサーだったと言えるでしょう。

## 61 政治評論家 長野祐也



シオ番組を持たれていました。私は番組に呼んでいただいたことが縁となり、長野さんと意気投合。「長尾さん、医療と政治がもっと繋がらなければ超高齢化社会は乗り切れませんよ」と、多くの熱意ある人をご紹介

長尾和宏（ながお・かずひろ）医学博士。東大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。近著「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。

「国のため」

人と人との架け橋に…

「国のため」  
「人と人との架け橋に…」

「実は膀胱がんになった、今後の治療法について相談したい」  
そのときも長野さんは大変冷静でした。悲観する言葉は一切なく、多くの治療法について勉強した上で、「何が一番得策だと思っか」と尋ねて来られたのです。「諦めることはありません。でも、いつか抗がん剤の止めどきが来ます。せつかくの延命治療が縮命治療にならぬよう、止めどきを見極めてください」とだけお話ししました。

「聞いていただきました。幅広い人脈を持ちながら、私欲に使うことなく利他の心だけで活動しておられました。国の未来のため人と人を繋げることが、何より嬉しそうでした。そんな長野さんから、折り入って相談があると連絡が来たのは、昨年春のこと。

「お礼の電話をもらったのはその翌週。「あなたの書いた「抗がん剤10のやめどき」という本を読みましたよ。良い止めどきは、医者じゃなく自分で見つけられたとのことです。」

「そのときも長野さんは大変冷静でした。悲観する言葉は一切なく、多くの治療法について勉強した上で、「何が一番得策だと思っか」と尋ねて来られたのです。「諦めることはありません。でも、いつか抗がん剤の止めどきが来ます。せつかくの延命治療が縮命治療にならぬよう、止めどきを見極めてください」とだけお話ししました。」

「この3月にもラジオに呼ばれました。かなり痩せられていましたが、言葉が淀むことはなく、鋭いインタビュアーを受けました。まさかそれから3カ月でお別れが来るとは、思いもありませんでした。」